

最花式土器

-在地式土器群の様相-

成田滋彦

目次

- 1 はじめに
- 2 最花式を振り返って（研究史にかえて）
- 3 土器の共伴と層位の問題
- 4 属性の抽出と分類
- 5 各地域における最花式

津軽半島地域

上北湖沼地域

馬淵川・新井田川地域

- 6 おわりに

最花式土器とは

最花式の地域的な様相

最花式の細別

最花もどきについて

引用・参考文献

1 はじめに

この土器型式に初めてであったのは、今から30年前の三厩村の中の平遺跡（鈴木1975）の調査にさかのぼる。

当時学生であった筆者は、地文縄文地に縦位方向に長楕円形文を施す土器が、いつの時期に該当するのかわからず困ったことを思いだす。

その後、県内の縄文時代中期集落において、大規模集落の一つに挙げられる六ヶ所村の富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）を調査した際に、多量の最花式土器が出土した。

しかし、報告書中の整理において充分に論考する事ができず、報告書以外に稿を新たにし、これらをまとめなければならないと思いつつ数十年がたってしまった。

昨年度、小笠原雅行が研究紀要第7号において、「最花式雜感」（小笠原2002）という論考を掲載した。

この論考を読んで、土器型式の研究の重要性を再認識するとともに、数十年前にまとめようと思った最花式を再検証しようと思った次第である。

また、最近の根拠がはっきりしない情報を基にした討論は、年代の縦軸となるべき土器の研究を全く無視した内容であり、あまりにも根拠のない空論としかいえないものが県内では多すぎると思われ

る。

正しい討論は、土器の編年を押さえてこそ始めるべきものであり、基礎的な土器編年の研究なくしては青森県の考古学の発展はないと認識した次第である。

なお、今回は県内の最花式の資料を中心として、分析・検討を加えたものである。

2 最花式を振り返って（研究史にかえて）

最花式を初めて紹介したのは、江坂輝彌が森田村の石神遺跡（江坂1970）で報告したのが最初の報告である。

江坂は、最花式土器（円筒土器上層 f 式）を括弧が書きで円筒土器上層式と記載し、円筒土器の系譜を引く土器群であると、理解していると考えられる。

この事は、意外と注目されていないが、最花式土器が円筒土器の系譜を引く土器型式であるとした点は、重要な意味を含んでいる。

なお、報告書中では最花式を第1類土器～第3類土器と3分類しており『…最花式土器としての特徴をとらえ本型式のものとしては、第1類と第3類土器を提示し…』と定義した。

しかし、最花式設定の混乱の第一歩は、円筒上層 e 式土器を含んでいる第1類土器を最花式とした点が、最花式を迷走させる原因となった（注1）。

また、二つ目の混乱は、『…なお本型式の土器を、かつて1939（昭和14年）年に角田文衛教授が「陸奥楓林遺跡の研究」の中で「楓林式土器」の名称を付して発表されたことがあった…』として、最花式=楓林式と並行関係にあるとした点である。

この二つの混乱は、その後の最花式の研究に尾を引くこととなる。

1974年に村越潔は、円筒土器を大系的にまとめた「円筒土器文化」（村越1974）を発表した。

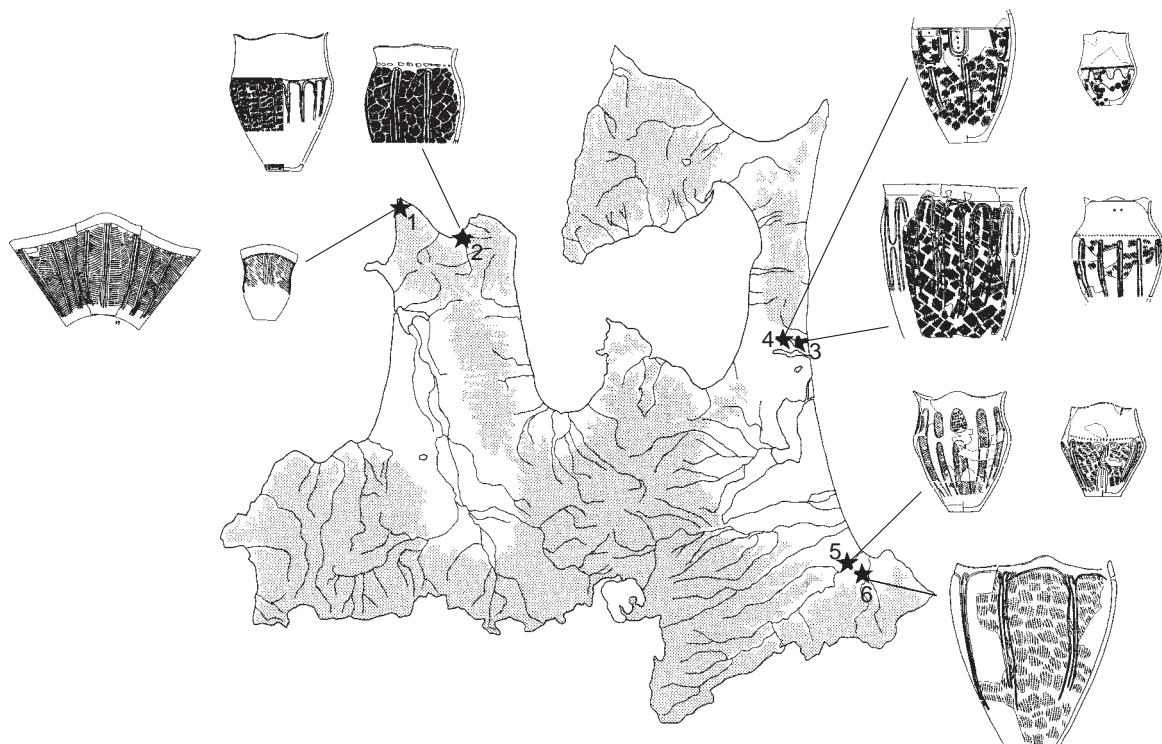


図1 遺跡位置図 1. 中の平遺跡 2. 山崎遺跡 3. 富ノ沢(1)遺跡
4. 富ノ沢(2)遺跡 5. 西長根遺跡 6. 松ヶ崎遺跡

その本文の中で、最花式の項目を設け、江坂氏の「石神遺跡」を基本とした考えを示しながらも、石神遺跡の第1類土器を除外し、第3類土器を最花式の標準的な土器であると記載している。

また、最花式の特徴として『…この型式の土器は、器形の大部分が肩部の張るそして口頸部の内湾した深鉢形を呈し、折り返し状の口縁をもつものや、稀には浅鉢形もある。文様は沈線の縦に施された長円形文が多く、また沈線による垂下文も存在する。地文は斜縄文で右下がりのものが多い…』という土器の特徴を文章にして提示しているのであるが、図化したのは、広口壺形土器数点のみであり、不明な点が多い内容である。

なお村越は、当時の土器の分布状況から、上北・三八地域を榎林式分布支配圏・下北地域を最花式分布支配圏と考えており、榎林式と最花式を同一時期とした。この考えは江坂の二つ目の混乱である最花式=榎林式の理論に立脚したものであり、村越の型式学的な誤認と筆者は考えている。

しかし、当時の極端な遺物の出土例の少なさから誤認するのもいたしかたない情勢であった。

この遺物の少なさは、小笠原好彦（小笠原1974）が「円筒式文化の崩壊とその意義」（小笠原1974）の中で円筒式文化が崩壊し、大木式文化にとって代わられるという過激な発言も表れた。

このような中期後葉の混迷の様相を見直し、新視点で展開したのは、三厩村の中の平遺跡（鈴木1975）の報告である。

鈴木克彦は、榎林式→中の平Ⅱ式→中の平Ⅲ式の土器編年の序列を発表した。また、翌年に論考した「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」（鈴木1976）は、中の平遺跡の発掘報告と共に鈴木編年の基盤となっているものである。

その後、一連の編年序列は縄文土器大観1（鈴木1989）・日本土器辞典（鈴木1996）で記載されているように、一貫して土器編年序列は替わることはない。

鈴木が設定した中の平Ⅲ式を表す特徴として、縦位沈線を施し、その上端を弧状につなぐ文様と平行沈線間に連続刺突を施す文様を基本的に提示しているが、その後の資料増加に伴い中の平Ⅲ式は変容していく。

なお、鈴木論考の中で、大木系土器文化という用語が使われ、現在も中期後葉を中心として、県内の報告書中で広く使用され流布されているが、大木系土器群を用いたのは、古くは林謙作が「日本の考古学Ⅱ 縄文時代」（林1965）に於いて大木系土器群を大木式そのものの用語としてもちいている。

一方、鈴木の考えは林の考えと違い大木系土器文化の理解を『…第一に大木系土器の出自は、大木式土器の直接的な波及による結果もたらされたものであること、第二にそういった第一段階から変化発展した次の段階では、型式変遷とは直接に係わることなく当該地方のオリジナルの推移を示しており…』つまり、鈴木の考えは、円筒土器は崩壊し大木式土器文化圏の枠の中に入り、あくまで亞流の地域に存在する土器群と理解しており、その思考は小笠原の考え方（小笠原1974）に近いのではないかと考えられる。

また、富樫泰時が縄文土器大成2—中期「東北地方」（富樫1981）の中で、円筒上層式以降の土器を『…円筒土器様式圏の伝統のうえに成立した変化とみなすことができ、大木土器様式の影響をうけながらも、それとは異なった雰囲気の土器をつくりだしたものと解釈…』とし、中期後葉の土器群は、円筒土器が消失したのではなく、在地式土器群が引き続き系譜として引き継がれ、その系譜は十腰内式土器を生み出したと記載し、円筒土器様式圏の残存がみられるとして、鈴木の考え方と相反する意

見もみられる。

ところで鈴木は、中の平遺跡から区画文はみられないのは、時期差ではなく地域差であると述べているが、この地域差は「東北地方北部の縄文中期後半の土器」（鈴木1998）では、西長根遺跡出土の磨消縄文の土器群を一つの地域差として捉えており、鈴木の地域差の考え方は、時間がたつにつれ変化がみられるものである。

その後、古市豊司は三内沢部遺跡の第9号住居跡と第22号住居跡の土器の文様施文の相異から鈴木が唱える地域差ではなく、中野平Ⅲ式の細分を考慮した時期差を想定した（古市1978）。

高橋潤は、県内の資料を用いて中の平Ⅲa式とⅢb式の二分に細別し、変遷を提示した（高橋1988）。

また、秋田県鹿角市の天戸森遺跡（秋元1984）が1981・1982年に調査がおこなわれ、青森県六ヶ所村の富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）で、中期の環状集落の調査が1989、1990年におこなわれ、東北北部の大規模な縄文集落の調査が続き、最花式の良好な資料が出土した。

特筆すべき点は、標識遺跡である最花貝塚の調査が開始された事である。最花貝塚は、第1次から第4次調査（橋1978・1980・1983・1986）までおこなわれたが、標式遺跡でありながら、引用されないという不運にみまわされている。

その原因としては、第1・2次調査の第Ⅲ層中の出土土器を一括で把握している点や、第3次調査の橋善光の『…何をもって大木式系土器の地方型とするか、何をもって最花式とするのかという点になればあまりにも問題が多くなり…』（橋1983）という最花式の認定への悩みであり、当事者の最花貝塚調査時点での苦悩は、そのまま土器型式設定の混迷へと導いたと思われる。

そのため、報告書中では最花式を読みとることが難しく、多くの研究者は引用をためらっているものと思われる。

また、八戸地区では縄文時代中期の大規模集落である松ヶ崎遺跡（村木1994・小笠原1995・1996）と西長根遺跡（小笠原・小保内1995）の調査がおこなわれ、磨消縄文を主体とした最花式が出土した。

この西長根遺跡の第4号住居跡出土の磨消縄文グループに対して、鈴木は西長根式（鈴木1998）を設定し、中の平Ⅲ式と併行関係にあるとした。

2002年に小笠原雅行（小笠原2002）は、最花式土器雑感において最花式の土器の属性をとりあげ、最花式をコンパクトにまとめている。

以上のように、最花式研究の歩みを概観したが、最花式が本県の縄文中期後半期の一つの土器型式に位置づけられている一方、その実態については不明な点が多い土器型式である。

3 土器の共伴と層位の問題

土器型式を把握する前提としては、第一義的に層位及び共伴関係を押さえる事が前提であろう。それでは最花式ではどうであろうか。小笠原雅行（小笠原2002）の見解は、土器の共伴関係について西長根遺跡の第10号住居跡内の層位遺物のみで、共伴関係は少ないとしているが、果たしてそうであろうか検証してみたい。

最初に遺物包含層を概観すると、中の平遺跡のみの出土報告しかない（注3）。中の平遺跡の報告の中で、『…中の平遺跡では、この一群の土器は榎林式や中の平Ⅱ式を若干混在して出土しながらも、榎林式とは若干層序を異にしてより上層に出土した…』（鈴木1975）〔ゴシック体は筆者作成〕という

報告は重要である。

しかし、柳沢清一は中の平遺跡の出土報告には否定的な見解であり、中の平Ⅱ式・Ⅲ式が同一層位で出土しているというように認識し、土器型式を全面に否定する考え方には筆者には理解できない（注4）。

現段階で層位関係で確認できたのは、中の平遺跡の一例のみである。

また、遺跡内の平面的な出土分布から、その時期差を探るやり方も、筆者は土器型式を考える有効な手段と考えている。

つまり、今別町山崎遺跡（小笠原1982）にみられるC地区の一括遺物で出土した中の平Ⅲ式の単純な文様パターンの出土などは、一時期の廃棄として注目される所である。

第二の出土状態からの検証方法は、遺構内という狭い空間内での把握方法である。この方法でも、すべてが把握できるとは限らない。遺構内から出土する土器が当時の器種組成・文様施文の土器をすべて廃棄しているのかという疑問がのこるのである。

また、遺構どうしの重複関係は型式設定の指標ともなりえるが、激しい遺構の切り合いは、重複の確認のまちがいがみられる。特に柳沢が指摘した（柳沢1991）鹿角市天戸森遺跡の第S I 71A・S I 71B号住居跡を指標としている点については、問題が多い（注5）。

なお、遺構内の良好な資料は、山崎遺跡（小笠原1982）・富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）・西長根遺跡（小笠原・小保内1995）から出土した遺構内の一括土器であり、5地区における最花式の項目で詳しく検討したいと思う。

共伴遺物に関しては、田中琢（田中1978）がモンテリウスを引用して『…同時代の製品であるとみなしうるのは、一括遺物において30回以上組み合わせになって発見されることが必要だ…』という理論は、筆者も同意見であり1例のみをとりあげて型式設定することは危険であり、共伴遺物の事例を吟味し、型式設定の指標とすべきと考えたい。

4 属性の抽出と分類

土器には、多くの属性があるが、ここでは形状と文様の二種を取り上げることとする。

形状（図8）

土器のもつプロポーションで、分類を行う。

A種 口頸部が内反するもので、口頸部の内反度で二種に細別できる。

A種1 口頸部が内反するもので、本種の中にも胴部が張るものと、張らないものとに分かれる。

（図8-1・22）

A種2 口頸部の内反が強く、肩部が極端に張る形状である。

（図8-8）

B種 胴部が張り口唇部寄りが内湾する形状である。また、口縁部が極端に張る形状である。

（図8-17）

C種 底辺部から口縁部にかけて外反する形状である。

（図8-14）

D種 底辺部が内反し、台部をゆうする形状である。

鹿角市天戸森遺跡

以上のように A～D種の4種類の形状に分類することができる。これらの形状は、A種は、A種1が深鉢形・鉢形、A種2の肩部が張るものは広口壺形、B種及びC種は、深鉢形・鉢形に、D種は

台付鉢形を呈するものである。

文様（図8）

最花式には数多くのバリエーションをもつものであり、これらを抽出すると次のようになる。

なお、文様構成は4段の文様構成・2段の文様構成・無段の文様構成と大きく3つに分類することができる、各種の文様構成毎に概観する。

1段の文様構成（懸垂文）

1段というのは、文様が単独で構成され、上下に分かれていらない事を表すものである。また、懸垂文は上下端のどちらかが開口している文様を、懸垂文という用語で表したい。

- ・直線状及び交差状に2～3条を束にして施文しているもの。（直線文）（図8-1）
- ・上端を弧状で閉じ、下端が開いているもの。また、その内部に直線及び連続刺突を施文しているもの。（長楕円形文）（図8-7）
- ・先端が丸くなり、蕨文様のもの。（蕨手文）（図8-2）

この上記の文様が一段の文様の基本であり、直線文・長楕円形文・蕨手文が個々の文様単位であり、これらを総称して懸垂文と呼称する。

2段の文様構成（区画文・懸垂文・連続文）

2段の文様構成というのは、上下2段にわかれた文様構成のことを2段と表現する。

なお、区画文とは上端がつながれた文様であり、連続文は蛇行する文様を表している。

- ・上位を区画文・下位を懸垂文で施文しているもの。（長楕円形文）（図8-17）
- ・上位を連続文・下位を懸垂文で施文しているもの。（連続・長楕円形文）（図8-22）
- ・連続文を多段化して施文しているもの。（蛇行文）（図8-20）
- ・上位を上端が開口しているJ字状文、下位を連続文を施文しているもの。（J字状・連続文）（図8-25）

上記のように、文様のバリエーションが多い点が特徴である。

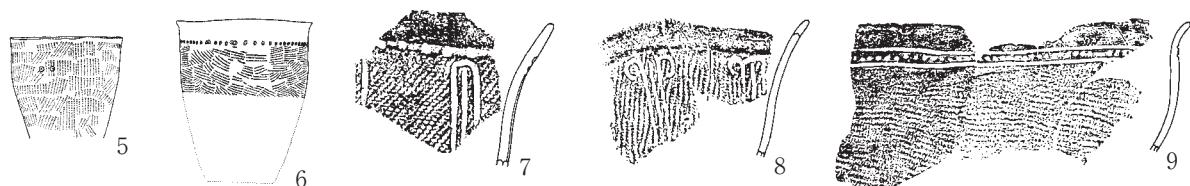
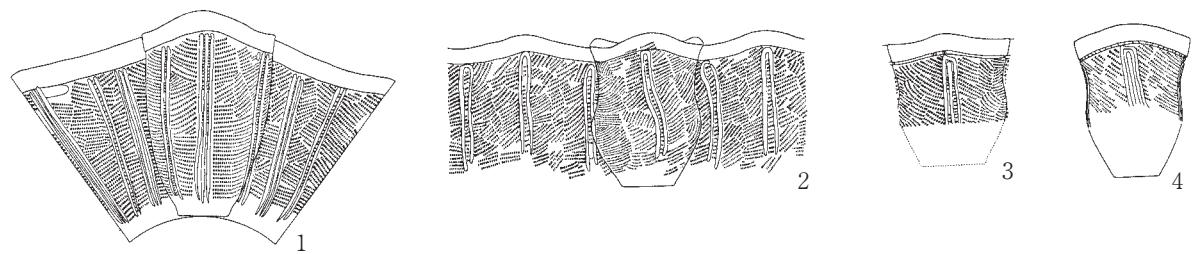
無段のもの（図9）

本類は、文様を構成しないものを本類している。

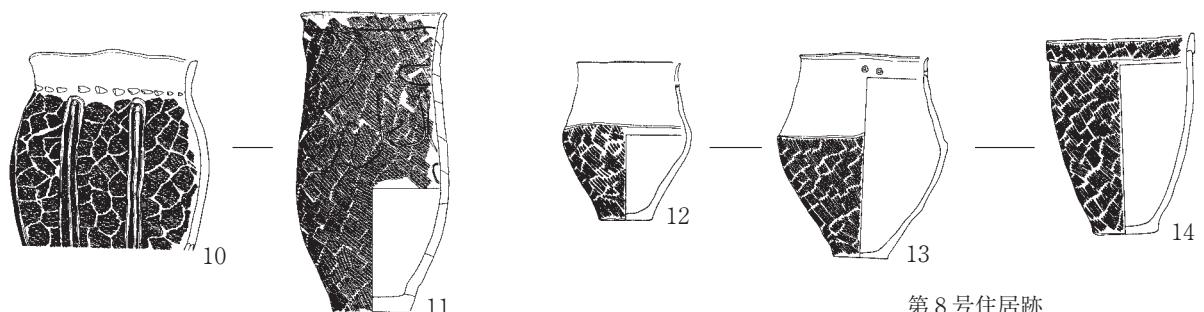
- ・横位に連続刺突を施文しているもの。（図8-38）
- ・横位に撲糸圧痕を施文しているもの。（図8-39）
- ・刺突と撲糸圧痕を施文しているもの。（図8-12）
- ・縄文を施文しているもの。（図8-41）

上記のように、連続刺突・撲糸圧痕・刺突と撲糸圧痕・縄文の文様であり、これらは器面が飾られない土器である。

この無段のものに分類した土器は、最花式の中で多く出土する類である。



中の平遺跡



第5号住居跡

第8号住居跡

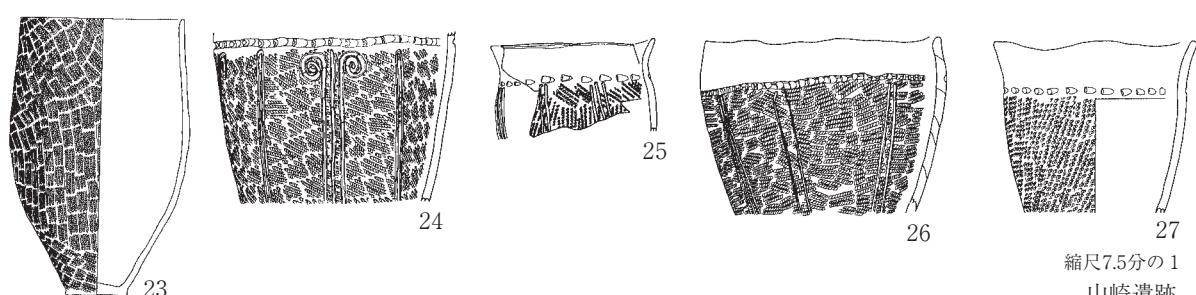
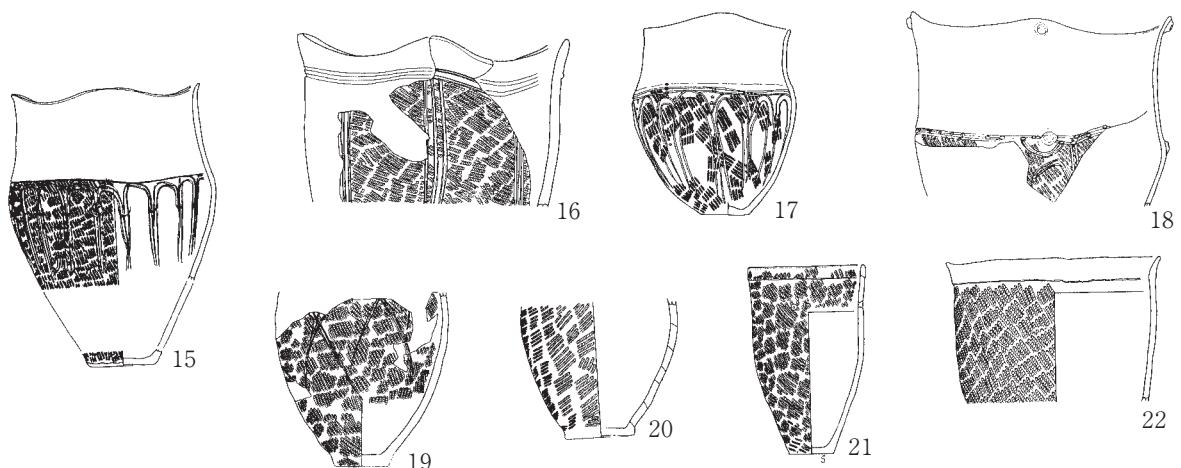
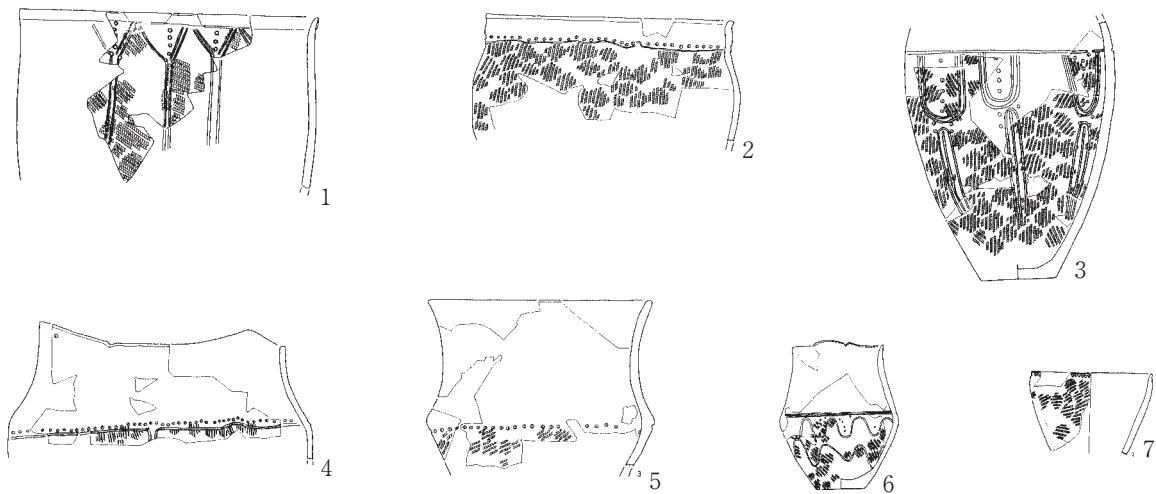
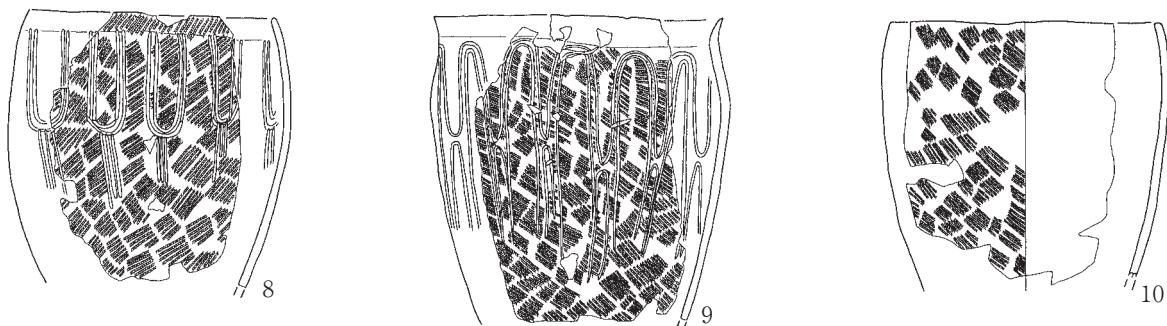
縮尺7.5分の1
山崎遺跡

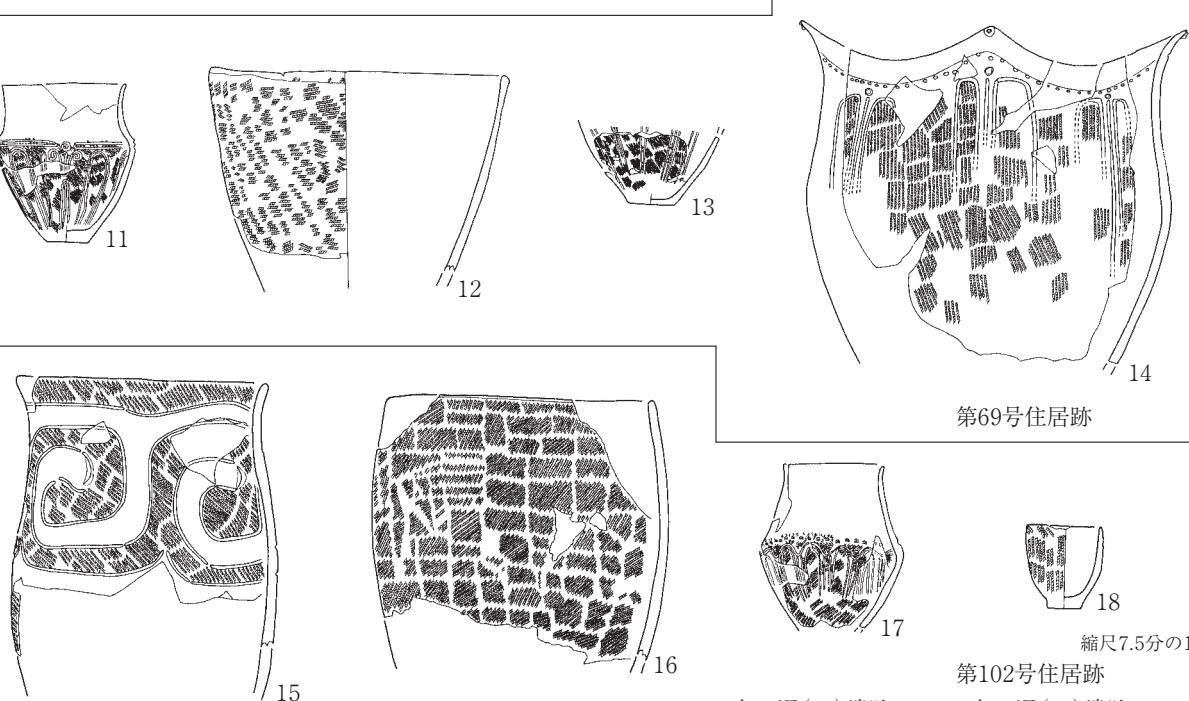
図2 中の平遺跡・山崎遺跡



富ノ沢(1)遺跡



第56号住居跡



第69号住居跡

第102号住居跡

縮尺7.5分の1

富ノ沢(1)遺跡1~7 富ノ沢(2)遺跡8~18

図3 富ノ沢(1)・(2)遺跡

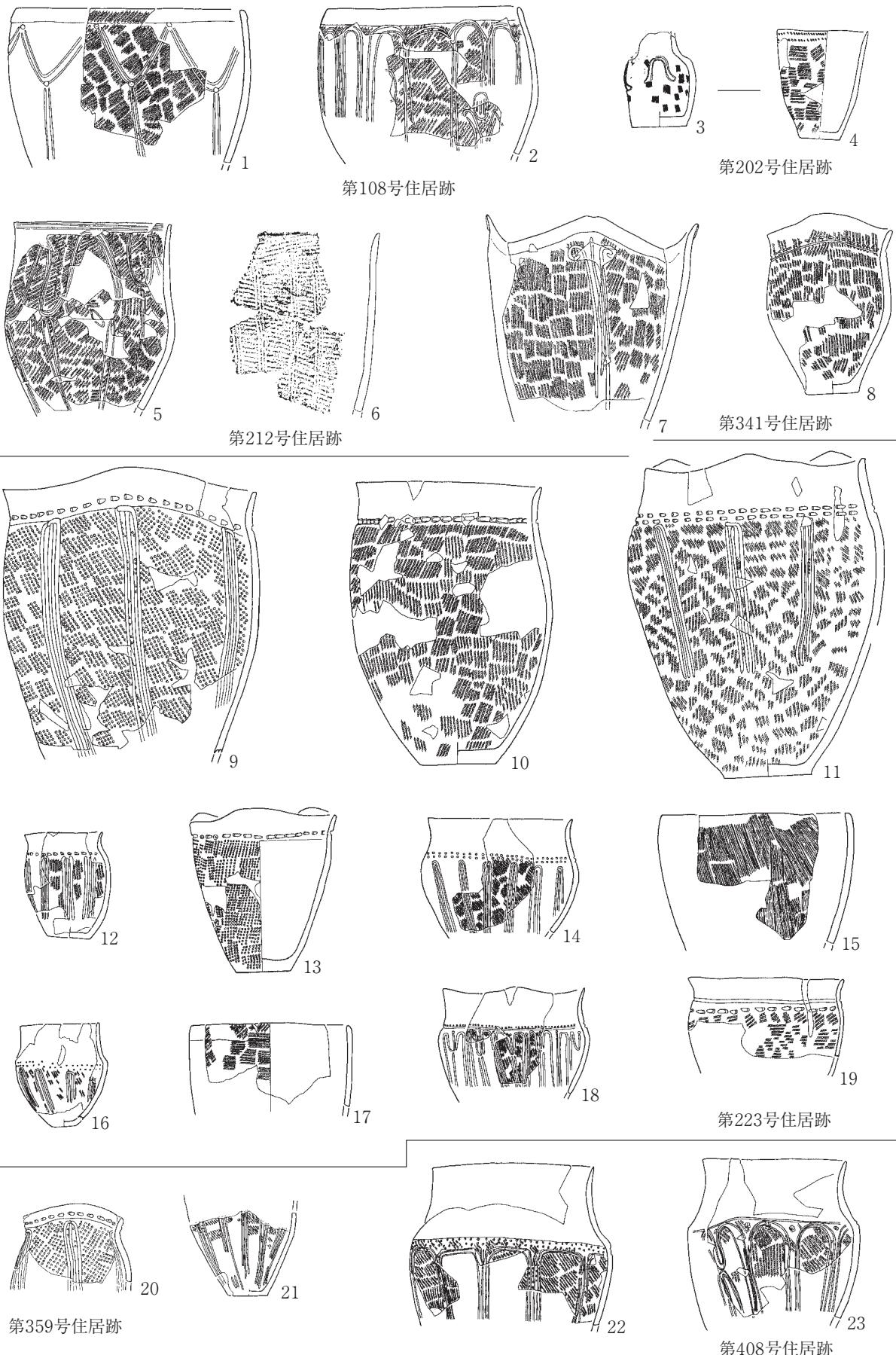
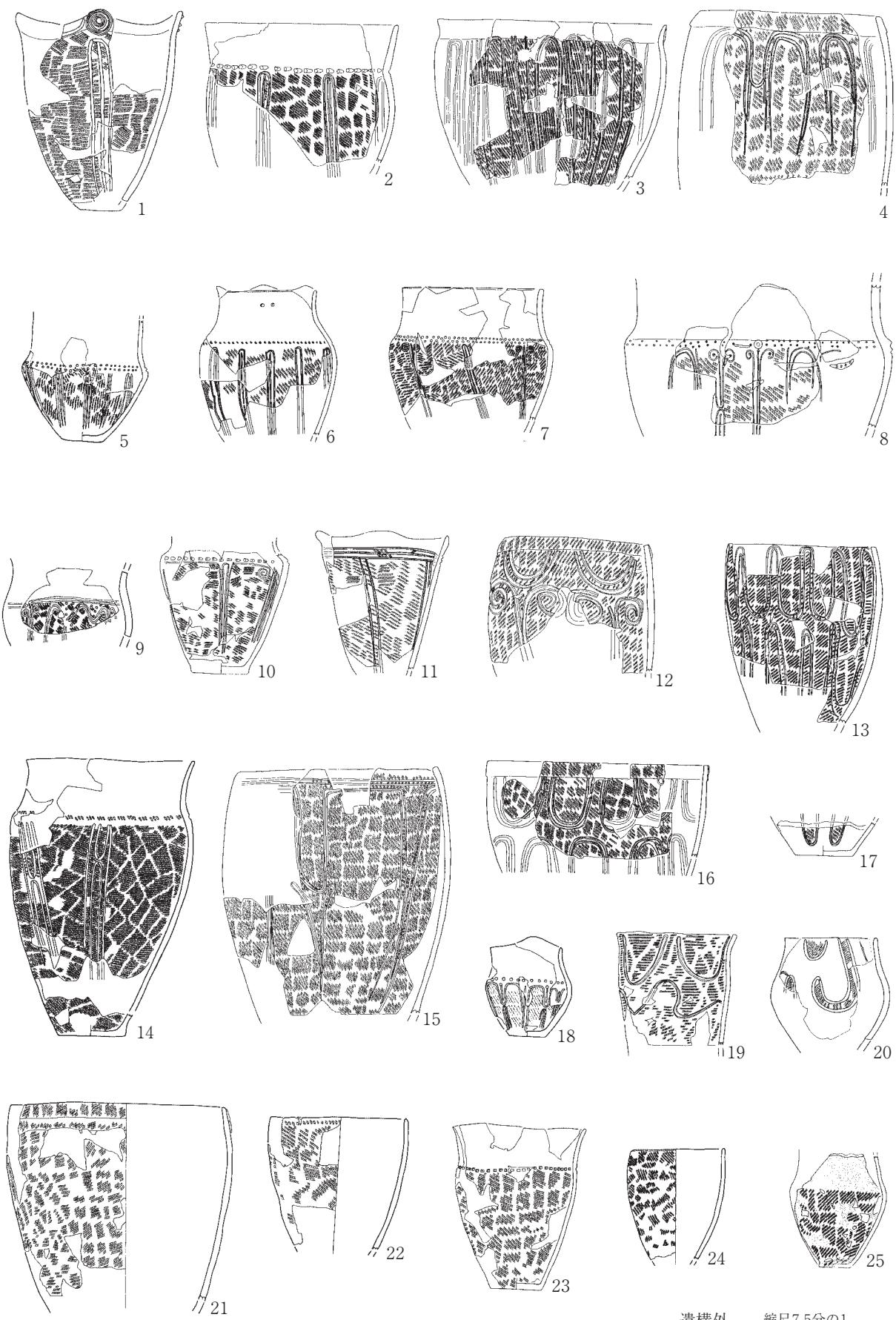


図4 富ノ沢(2)遺跡(1)



遺構外 縮尺7.5分の1

図5 富ノ沢(2)遺跡(2)

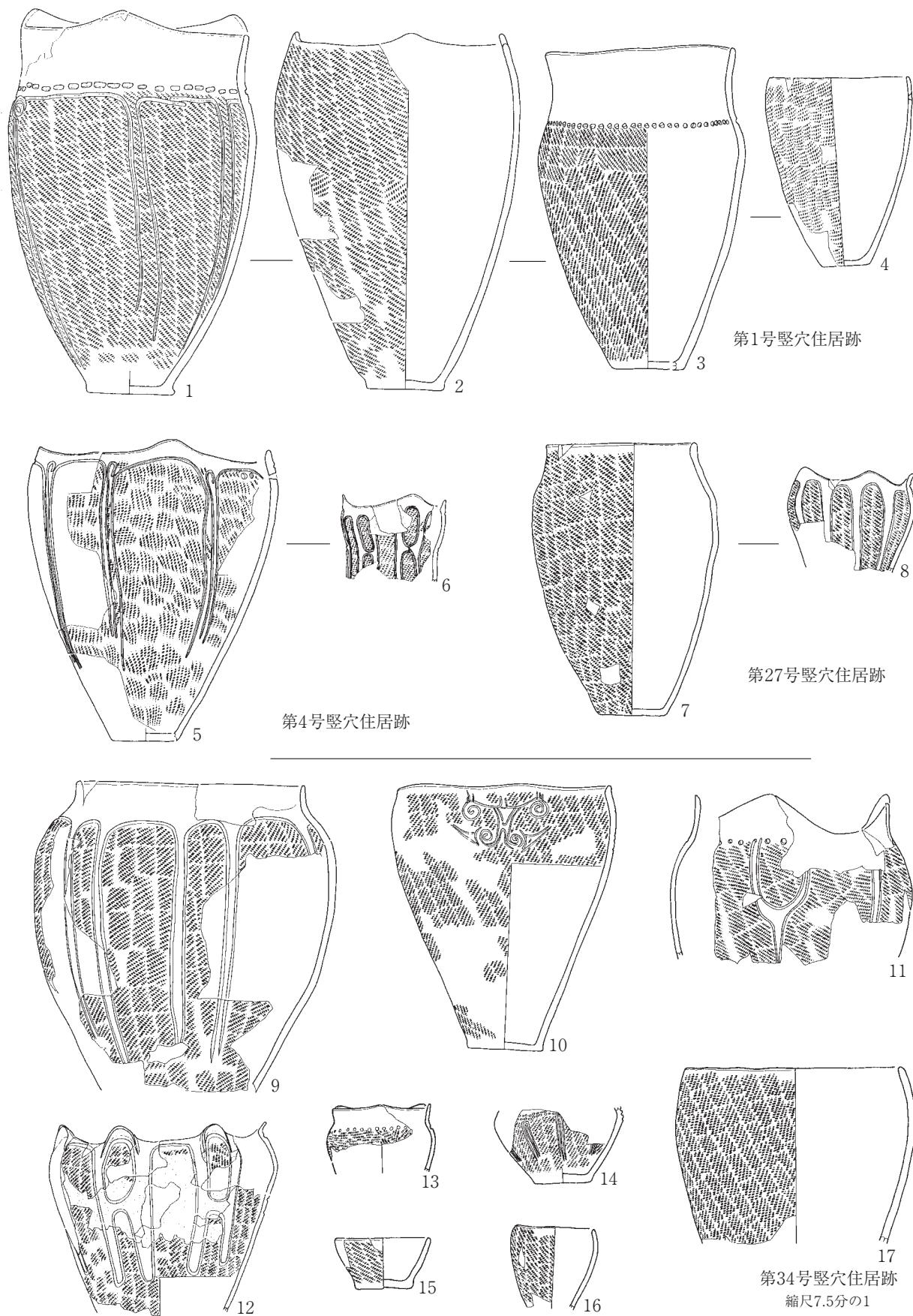


図6 松ヶ崎遺跡

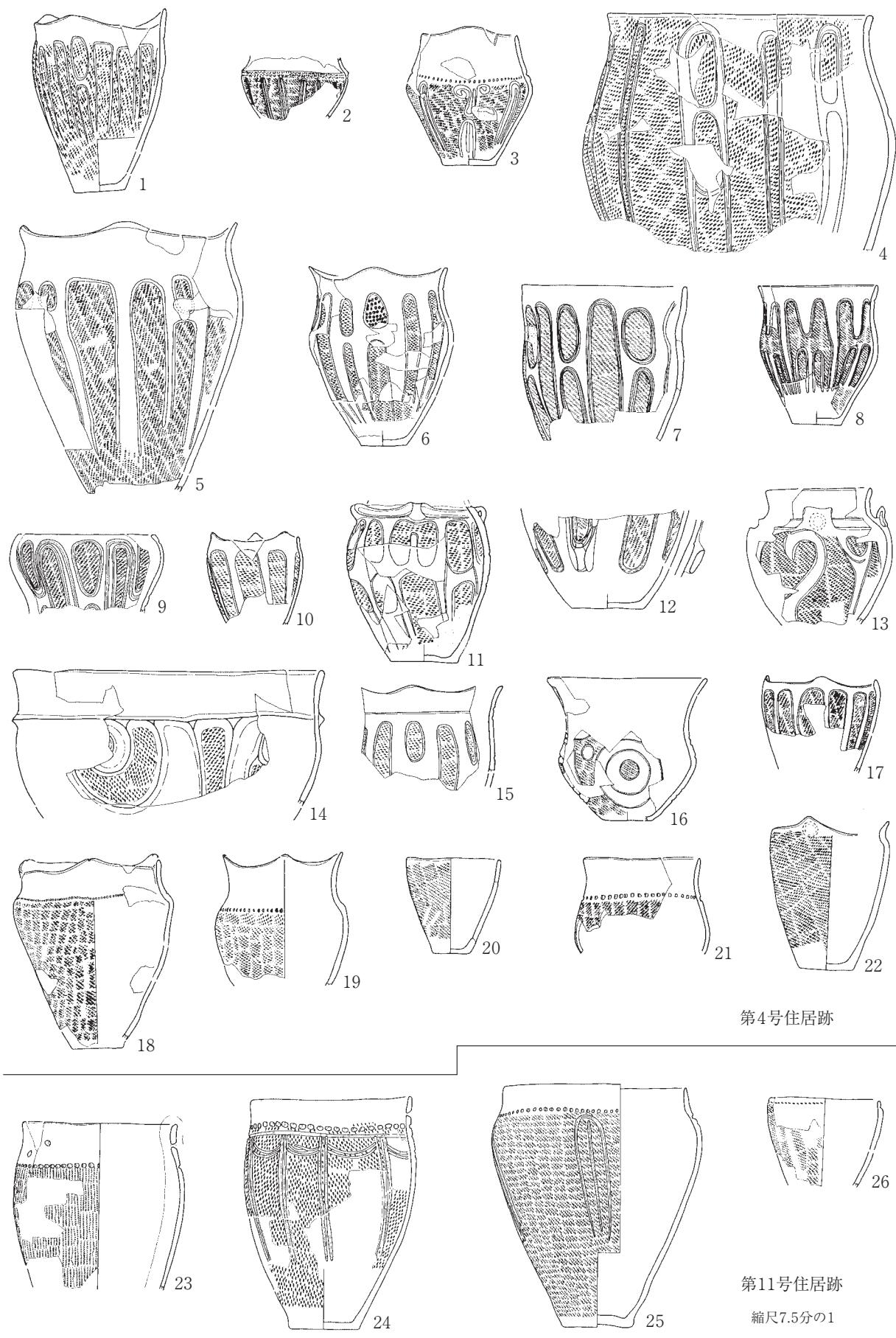


図7 西長根遺跡

第11号住居跡

縮尺7.5分の1

5 各地域の最花式土器

津軽半島地域

三厩村中の平遺跡（鈴木1975）・今別町山崎遺跡（小笠原1982）の2遺跡を分析する。

土器の共伴関係

中の平遺跡では、遺物包含層から一括して出土しており、前段階の中の平Ⅱ式の土器が一部混入しているものの、プライマリーな出土状態をなすものである。

山崎遺跡では、最花式がA・C地区の離れた地点からまとまって出土した。特にC地区の一括遺物は、中の平遺跡の文様構成が類似しており、まとまった資料である。

なお、遺構内からはA地区の第5号住居跡の覆土（図2-10・11）及び第8号住居跡の床面一括遺物（図2-12～14）などが共伴している遺物である。

文 様

中の平遺跡では、形状がA種の口頸部が内反する深鉢・鉢形であり、文様も一段の文様構成で、長楕円形文の懸垂文（図2-2）・無段の縄文（図2-5）・連続刺突文（図2-6）であり、形状及び文様のバリエーションがすくない土器群である。鈴木は、この土器を用いて中の平Ⅲ式を設定した。

山崎遺跡では、A地区の図2-11で二段のJ字状文と一段の文様構成の懸垂文と組合わさっている。交差状及び二段の文様構成の土器も出土しており、C地区と様相を異にしている。

C地区では、図2-23～27では、一段の文様構成で、蕨手文・直線文・長楕円形文を施文しており、中の平遺跡出土土器と同様なモチーフである。

上北湖沼地域

六ヶ所村富ノ沢（1）遺跡（成田・奈良1989）・富ノ沢（2）遺跡（成田他1992・1993）の2遺跡を分析する。

土器の共伴関係

富ノ沢（2）遺跡では、2ヶ所の捨て場が存在したが、層位的につかむ事ができず、住居跡内から共伴がみられる土器が出土した。

富ノ沢（1）遺跡では、88—9号住居跡の覆土の一括遺物である。

富ノ沢（2）遺跡では、第56・102・212号住居跡の床面・床直遺物、第69・108・202・223・341・359・408号住居跡の覆土一括遺物が共伴している遺物である。

文 様

1段の文様構成の土器は、A種の口頸部が内反するものが主体を占める。文様は、上端が閉じ下端が開く長楕円形文と蕨手文を施文している。

2段の文様構成の土器は、A2種の口頸部が内反する広口壺形土器の形状を呈するものが少ない。文様は、上位を区画文で下位に蕨手文（図5-12）・懸垂文（図3-8）・横位蛇行文（図3-15）を施文している。また、上位を連続文で下位に懸垂文（図5-15）・長楕円形文（図5-16）を施文している。

無段の文様構成の土器は、連続刺突（図5-23）・撫糸圧痕（図5-22）・縄文（図5-24）を施文している。

馬淵川・新井田川地域

八戸市の松ヶ崎遺跡（小笠原1995・1996）・西長根遺跡（小笠原・小保内1995）の2遺跡を分析する。

土器の共伴

松ヶ崎遺跡では、第1・4・27・34号竪穴住居跡の覆土の一括遺物、西長根遺跡では、第4・10・11号竪穴住居跡の覆土の一括遺物が、共伴していると考えられる。

文 様

1段の文様構成は、地文縄文に長楕円形文を施文するものであり、地文縄文（図6-1）と磨消縄文（図6-9）がみられる。

2段の文様構成は、上位を区画文、下位を懸垂文の長楕円形文（図7-7）を施文するものが多く、磨消縄文が主体を占める。

無段の文様構成は、連続刺突・縄文・撫糸圧痕を施文している。

6 おわりに

最花式土器とは（図7）

形状は、前記で記載しているようにA～D種の形状をゆうする。

D種の台付鉢形は、鹿角市天戸森遺跡（秋元1984）のみの出土であり、地域的な強い形状である。

A種の口頸部の内反する形状は、A1種が深鉢・鉢形に多く、A2種が肩部が張り広口壺形（図7-5）におおくみられる形状であり、最花式の主体を占める形状である。

B種の内反する形状（図7-17）は、最花式では主体的でない形状であるが、（図7-30）のように極端に張りだしており、大木式のキャリパー形の影響を受けたとも考えられる。

文様は、1段の文様構成・2段の文様構成・無段の文様構成と三つの文様構成が確認される。1段は、直線及び上端を閉じる長楕円形文（図7-3）及び蕨手文（図7-2）を施文しており、全体の文様構成は単調な文様パターンである。

2段の文様構成は、上位に区画文（図7-35）・連続文（図7-19）であり、下位に懸垂文（図7-18）を組み合わせた文様である。

無段の文様構成は、口頸部のくびれ部に連続刺突（図7-38）・撫糸圧痕（図7-39）を施文しているものや、縄文のみ（図7-41）を施文しており、最花式の中では出土例が多いものである。

なお、土器の施文にあっては地文縄文と磨消縄文がみられる。磨消縄文は県南部に多くみられる地域的なものである。

器形は、深鉢・鉢形、広口壺形、台付鉢形であり、2段の文様構成の土器には、広口壺形土器は少ない。

最花式の地域的様相

今回は、津軽半島地域、上北湖沼地域、馬淵川・新井田川地域の3地区を概観した。

これらの3地域を概観すると、津軽半島地域ではA種の口頸部が内反する形状が多く、かつ一段の文様構成が多い地域であり、地文縄文が主体を占める。

上北湖沼地域では、形状がA～C種が確認されA種の形状が主体を占める。

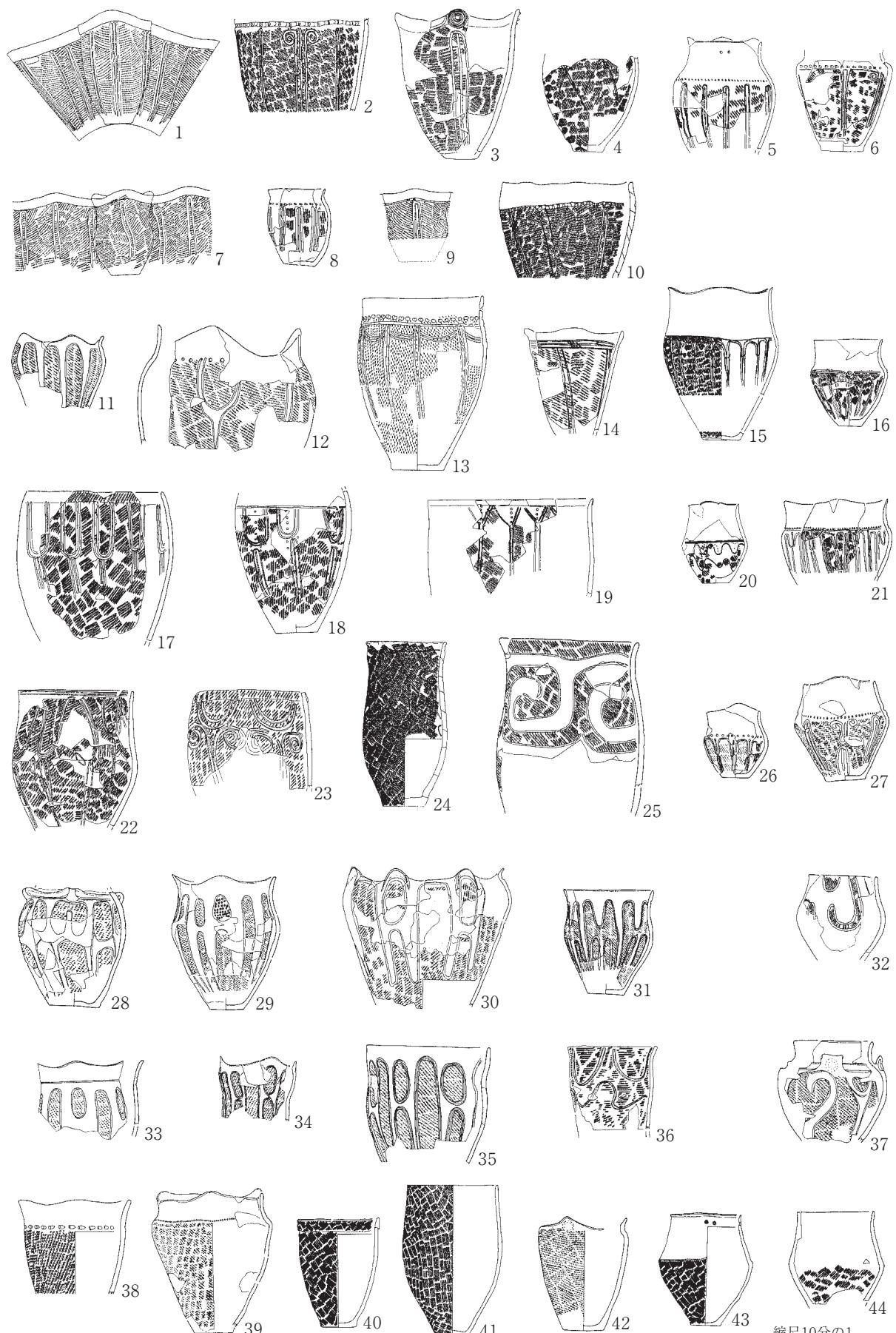


図8 最花式

縮尺10分の1

文様は、1段・2段・無段の文様構成があり、2段では上位に区画文・連続文、下位に長楕円形文を施文しているものが多い。なお、磨消繩文がみられるものの、地文繩文が主体を占める地区である。

馬淵・新井田川地区では、1段の文様構成では長楕円形文が多く、直線状・蕨手文の施文が少ない。

2段の文様構成は、上位に区画・下位に長楕円形文の文様バターンが主体を占める。また、磨消繩文を多く施文しており、他の地域と比較すると磨消繩文が多い地域である。

3地区では、地文繩文と磨消繩文の施文の違いがみられるものの、文様施文にあっては変化はみられない理解したい。

最花式の細別

最花式の細別に関しては、古市が三内沢部遺跡の調査例を基に第9号住居跡と第22号住居跡の様相差より時期差を設定し（古市1978）、小笠原善範は山崎遺跡の資料を中心として、第I～V段階の細別（小笠原1982）を、高橋は二区分の細別を提示（高橋1988）し、最花式の細別のこころみが行われてきた。

最花式は、中の平遺跡（鈴木1975）の層位一括遺物及び山崎遺跡のC地点からの平面的な分布で出土した一括遺物が型式設定のメルクマールとなるものである（注6）。

これらは、一段の文様構成をゆうするグループの土器が出土した。

また、遺構内の共伴遺物を概観すると、一段の文様構成の共伴は、富ノ沢（2）遺跡の第69号住居跡（図3-11～14）、第359号住居跡（図4-20～23）である。

2段の文様構成の共伴は、富ノ沢（2）遺跡の第56号住居跡（図3-8～10）、第108号住居跡（図4-1・2）である。

これらのことから、一段の文様構成と二段の文様構成とは、独立した文様構成をもつグループであり、古市が指摘した時期差として捉えるべきであろうか、高橋は二段の文様構成→一段の文様構成の変遷を期しているが、山崎遺跡の第5号住居跡（図2-11）、富ノ沢（2）遺跡の第102号住居跡（図3-15）の土器は、上端が開口したJ字状文であり、区画の波頭状文が未発達のものである。従来の編年では大木10式併行期の範疇に属した土器である。

今回、共伴の遺物を精査した所、一段の文様構成（図2-10・図3-17）の長楕円形文と共にいたった。

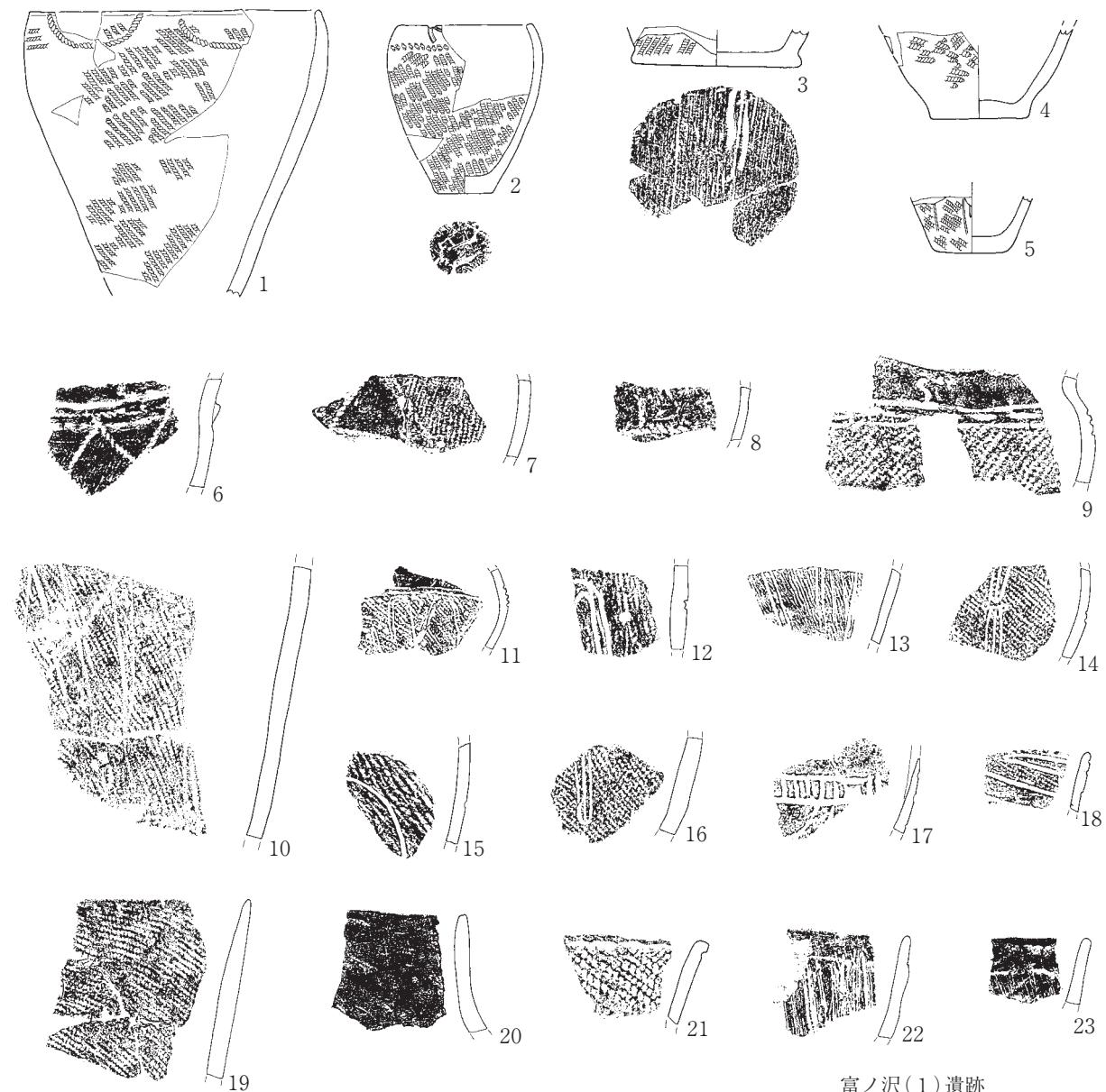
つまり、一段の文様構成のグループが最花式の後半段階に位置づけられ、二段→一段の文様構成の変遷も充分に考えられるところである。

しかし、最花式の細別に関しては、今後更に資料を吟味して再検討したいと思う。

最花式もどきについて（図9）

当該地域には、在地式の最花式の土器以外に、他地域の土器形式の文様要素を一部取り入れた土器が存在する。

それを筆者は、この土器群（似てるようで・似ていない土器群）をもどき（注7）という用語で表したい。

富ノ沢(1)遺跡
88-9号住跡

縮尺3.75分の1

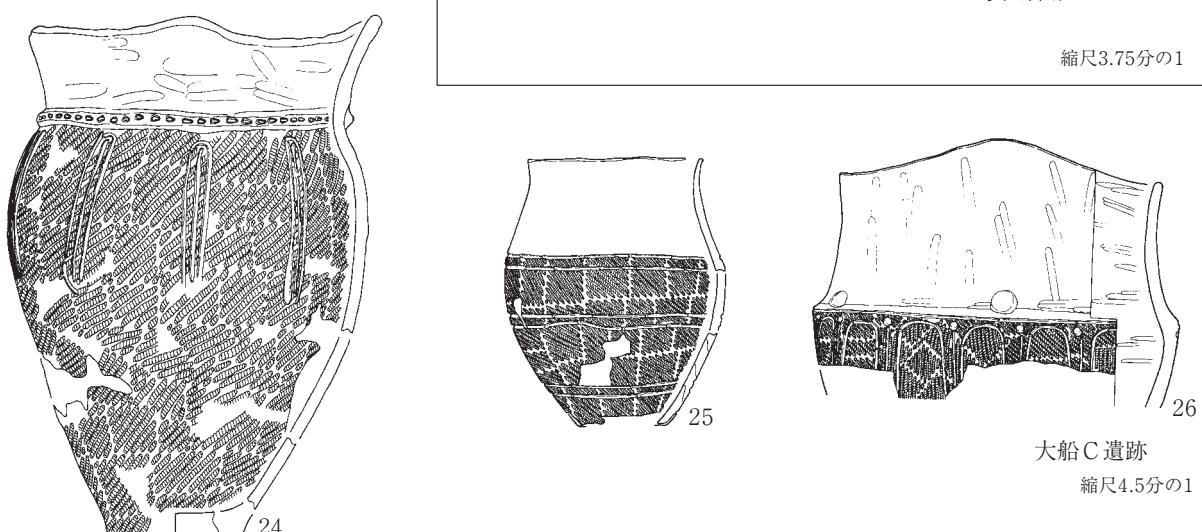


図9 最花式もどき

海峡を挟んで、青森県地域と道南地域のもどきの土器を検証したいと思う。ところで、本県の現状は、北海道の余市式土器の関連及び併行関係が、いまだ不明な点が多い。

このことは、本県からの出土例が少ない点があげられるが、六ヶ所村の富ノ沢（1）遺跡（成田・奈良1989）の88-9号住居跡からの出土資料が、余市式を検討するのにあたって、注目される土器群と思われる。

住居跡からの出土例は少ないが、図9-1・6・9は床面・床直の土器であり、他はすべて堆積土中からの出土遺物である。文様は一段の文様構成を主体としており、他型式を介在しない短期間の廃棄による一括遺物と考えられる。

土器の文様構成で、注目される点は撚糸圧痕の土器である。図9-2は横位に一条の撚糸圧痕を施文、最花式に普遍的にみられる土器である。一方、図9-1・6の弧状及び連続した文様及び斜位で圧痕した鋸歯状文を施文している土器は、最花式の撚糸圧痕と様相を異にする土器群である。

これらの撚糸圧痕を多様する土器を、筆者は余市式の影響を受けた一群のもどきの範疇と考えている。

一方、北海道の道南では、函館市西股遺跡（松下他1974）・南茅部町大船C遺跡（阿部1998）において最花式が出土しており、最花式と最花式もどきの二つのタイプが確認される。

最花式は、図9-26であり、口縁部が無文化され、肩部に区画線を用いて胴部文様帯を構成しており、地文縄文に縦位方向に懸垂文を施文している（注8）。

一方、最花式もどきの土器は、図9-24がくびれ部に粘土紐を巡らし、長楕円形文（下端を閉じる）の土器である。図9-25は、3段に2状の横位沈線を巡らす土器などが、最花式もどきであると解釈したい。

そうなると、道南では在地式の土器群（余市式）・最花式・最花式もどきという3つのグループが確認され、大木9式もどきの3つのグループが確認される。

つまり、一時期の土器型式には主体的な系統の土器群（在地式）の他に客体的なもどきが存在し、それらが一体となって一つの土器型式を形成していると考えたい。

最後に、紙数の関係で県内の三地区を選択し分析したが、他の陸奥湾地区・下北半島地区・津軽地区・米代川流域地区等の多くの地区を分析することができなかった。

今後、これらの地域も含めて最花式を再検証していきたいと思う。

注

注1 江坂輝彌氏の土器型式の混乱は、27ページ第6図で提示した「後期初頭の土器」（本文では説明が無い）が、円筒土器の範疇に入る土器であり、型式認識に混乱がみられる。

なお、橋氏が設定した最花式の認定にも江坂編年の影響を与えたというのは、筆者の飛躍した考えであろうか。

注2 小笠原善範（小笠原1996）は、報告書で松ヶ崎遺跡と西長根遺跡とは同じ遺跡ではないかと記載しているが、筆者も同一の遺跡と理解しており、その規模から県南最大の拠点的な集落と考えられる。

- 注3 平成4～6年の青森市三内丸山遺跡の調査では、遺物包含層及び盛土の調査で大量の中期後葉の遺物が出土したといわれている。未報告分が多いが、土器型式に新しい息吹を与えてくれるものと、その公開に期待しているところである。
- 注4 この様な柳沢清一氏の誤った認識は、一部の混在した状態（本文のゴシック体は筆者作成）という文章から判断した考え方と思われるが、根拠とはならないと筆者は考えている。
- 注5 柳沢清一氏のS I 71号住居跡の新旧関係には、誤認がみられる。また、実体験から遺構内の激しい重複関係は、ときとして判断を誤らせる事が多い。
なお、八戸市弥次郎窪遺跡の出土土器を全面に用いている事に関しては賛同できない、数片しか出土していない資料を全面引用し、型式の指標とすべきは混乱の原因となるからである。
- 注6 遺物の平面的な出土分布を押さえる事は、山下遺跡（中村1999）の廃棄ブロック（S T 1～3）の調査で十腰内I式の時期差をおさえる事ができた。そのため、層位的に出土しない現在において、時期差を把握する有効な方法の一つと考えている。
- 注7 もどきという用語は、林謙作が亀ヶ岡式土器の施文手順と相異する土器を亀ヶ岡もどきとして用いている。
筆者は、土器に施される文様及び施文技法が、在地の土器群の系譜と異質であるという意味で使用している。
- 注8 道南の最花式の広口壺形土器の器形を呈するものが多い。このことは、本県の大木7b式が浅鉢形が主体にみられる事と相似しており、最花式の段階で、ある器種のみが海峡を越えた事も考えられるのである。

引用・参考文献

- 秋元 信夫（1984）『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26 鹿角市教育委員会
- 阿部 千春（1998）『大船C遺跡』南茅部町教育委員会
- 江坂 輝彌（1970）『石神遺跡』ニューサイエンス社
- 小笠原 善範（1995）『松ヶ崎遺跡第2次調査』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 八戸市教育委員会
- 小笠原 善範（1996）『松ヶ崎遺跡第2次C地点』八戸市埋蔵文化財調査報告書第65集 八戸市教育委員会
- 小笠原 善範・小保内 祐之（1995）『西長根遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 八戸市教育委員会
- 小笠原 幸範（1982）『今別町山崎遺跡（1）・（2）・（3）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集 青森県教育委員会
- 小笠原 好彦（1974）「円筒式文化の崩壊とその意義」東北の考古・歴史論集 宝文堂
- 小笠原 雅行（2002）「最花式土器 雜感」研究紀要第7号 青森県埋蔵文化財調査 センター
- 熊谷 常正（1982）『岩手の土器』岩手県立博物館
- 鈴木 克彦（1975）『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 青森県教育委員会
- 鈴木 克彦（1976）「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」北奥古代文化第8号 北奥古代文化研究会
- 鈴木 克彦（1989）「縄文土器大観 1 最花式（中の平Ⅲ式）土器」小学館
- 鈴木 克彦（1996）『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
- 鈴木 克彦（1998）「東北地方北部の縄文中期後半の土器」研究紀要第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 高橋 潤（1988）「北部東北地方の縄文中期終末に於ける土器編年試案（1）」撲糸文第16号 青森山田高等学校考古学研究部
- 橋 善光（1978）『最花貝塚第1次調査報告』むつ市文化財調査報告第4集 むつ市教育委員会
- 橋 善光・奈良 正義（1980）『最花貝塚第2次調査報告』むつ市文化財調査報告第6集 むつ市教育委員会

- 橋 善光他 (1983)『最花貝塚第3次調査報告』むつ市文化財調査報告第9集 むつ市教育委員会
- 橋 善光・奈良 正義 (1986)『最花貝塚発掘調査報告(第4次)』むつ市教育委員会
- 田中 琢 (1978)「型式学の設定」日本考古学を学ぶ(1) 有斐閣選集
- 富樫 泰時 (1981)「縄文土器大成2 中期 東北地方」講談社
- 中村 哲也 (1999)『山下遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第258集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦・奈良 昌毅 (1989)『富ノ沢(1)・(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第118集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦・奈良 昌毅 (1991)『富ノ沢(1)・(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査 報告書第133集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦他 (1992)『富ノ沢(2)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集 青森県教育委員会
- 成田 滋彦 (1993)『富ノ沢(2)遺跡VI』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集 青森県教育委員会
- 丹羽 茂 (1989)「中期大木式土器様式」縄文土器大観1 小学館
- 林 謙作 (1965)「日本の考古学Ⅱ 縄文時代 東北」河出書房新社
- 林 謙作 (2001)「亀ヶ岡と亀ヶ岡もどき」縄文社会の考古学 同成社
- 古市 豊司 (1978)『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 青森県教育委員会
- 松下 亘他 (1974)『西股』北海道第四紀研究会
- 宮 宏明 (1981)「ノダップⅡ式土器の検討」考古学研究第28卷第3号 考古学研究会
- 村木 淳 (1994)『松ヶ崎遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集 八戸市教育委員会
- 村越 潔 (1974)「円筒土器文化」雄山閣出版
- 柳沢 清一 (1991)「「榎林式」から「最花式」(中の平Ⅲ式)へ-陸奥中期後半編年の再検討-」古代91号 早稲田大学考古学会